

【目的】 春出荷作型のトルコギキョウ栽培では、開花を促進させるために夜間の高温管理が必要であり、冬期の暖房用燃料の消費量が多いことが問題となっている。そこで通常よりもエネルギー消費量を削減できる温度管理方法を明らかにするため、高昼温低夜温条件が開花期や切り花形質に与える影響を検討したので報告する。

【材料および方法】 供試品種には‘ボレロホワイト’と‘あずまの碧波’の2品種を用いた。いずれも9月20日に播種、10月末まで20℃で冷房育苗し、11月29日に2.5号ポットに定植した。ポットは10cm（幅10cmの9マス幅ネット使用）で2列おきに1列空ける間隔とし、開花まで底面給水ベンチ上で管理した。ポットの用土にはピートモスを、施肥には被覆燐硝安加里 100 日タイプを1株当たり3g用いた。試験区の加温温度は、時間帯を①7:00～12:00、②12:00～16:00、③16:00～7:00の3つに分け、それぞれの時間帯の加温温度を試験区1では35℃-35℃-8℃、試験区2では35℃-8℃-8℃、試験区3では30℃-8℃-8℃、対照区は25℃-25℃-18℃とした。試験区の温度処理は、定植日から4月30日まで行った。

【結果および考察】 平均採花日は、‘ボレロホワイト’では試験区1が対照区よりも17日早く、試験区2と試験区3もそれぞれ9日と6日早かった。‘あずまの碧波’では試験区1が対照区よりも12日早かったが、試験区2と試験区3は対照区と差がなかった（第1表）。

切り花品質は、‘ボレロホワイト’では対照区が切花長、切花重、茎径で他の試験区よりも優れ、節数が多いことが特徴的だった。他の試験区間の差は少なく、試験区1で分枝数が多かった。花器のボリュームを表す主茎頂花重は対照区が最も重く、試験区3がそれに続き、試験区1と2は軽かった。‘あずまの碧波’では試験区3と対照区が切花長、切花重、茎径で他区よりも優れていた。対照区は節数が多かったが、分枝数が少なかった。主茎頂花重は試験区間の差がなかった（第1表）。

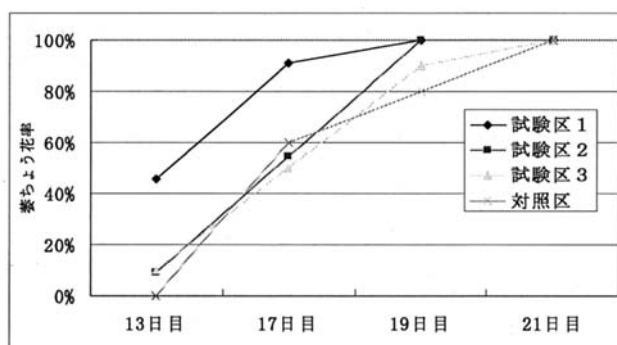
切花の花持ち日数は‘ボレロホワイト’では試験区1が他の試験区に比べて短かく（第1図）、試験区2と試験区3は対照区と差がなかった。‘あずまの碧波’も同様の結果であった（データ省略）。

以上のことから、トルコギキョウを高昼温低夜温条件で管理すると、日中の加温温度が高く加温時間が長いほど開花が早まり、切り花品質は低下するが、温度管理を7:00～12:00は30℃、12:00～7:00は8℃とすると品質の低下が少ないことが判明した。

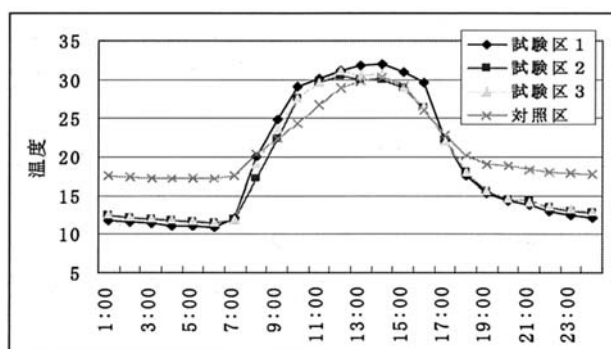
第1表 開花期と切花諸形質

品 種	試験区	平均採花日	切花長 (cm)	切花重 (g)	節数	茎径 (mm)	分枝数	有効花蕾数	主茎頂花重 (g)
ボレロホワイト	1	4月25日 c	121.8 c	105.7 b	15.1 b	6.2 b	4.2 a	7.3 a	2.6 c
	2	5月3日 b	132.4 b	109.0 b	15.4 b	6.3 b	3.1 b	5.9 b	2.7 c
	3	5月6日 b	126.3 c	113.4 b	15.5 b	6.5 b	3.4 b	6.8 ab	3.0 b
	対照	5月12日 a	137.4 a	125.6 a	19.9 a	6.8 a	3.3 b	7.0 a	3.4 a
あずまの碧波	1	4月19日 b	103.6 b	87.0 c	13.3 c	6.2 b	3.5 a	7.6 ab	—
	2	4月29日 a	111.0 a	92.5 bc	14.2 b	6.2 b	3.3 ab	7.4 ab	2.1
	3	5月1日 a	111.2 a	102.1 a	14.3 b	6.7 a	3.4 ab	8.2 a	2.1
	対照	5月1日 a	111.1 a	97.8 ab	18.0 a	6.6 a	2.9 b	7.0 b	2.2

注) 同一品種内の縦異符号間に有意差あり (Tukey, $p < 0.05$)



第1図 切花の花もち日数（ボレロホワイト）



第2図 平均温度（11月～4月）